

## ■ ユーロ/ドルには一段の上値余地! ?

昨日(22日)明らかになった米連邦公開市場委員会(FOMC)の結果は、事前の予想通り「0.25%ポイントの利上げ」で、参加者らによる金利見通し(ドット・プロット)の中央値は「5.125%に据え置き」であった。

ドット・プロットについては、事前に上方修正の可能性も囁かれていたことから、ややハト派寄りの印象。また、FOMC声明において「インフレ目標達成のため、継続的な利上げが適切になると予想する」とした前回までの表現が削除されたことや、FOMC後の会見でパウエル米連邦準備理事会(FRB)議長が「利上げ休止を検討した」と発言したこともドル売りを加速させるに十分なインパクトとなった。

もっとも、パウエル議長は「年内利下げは見込んでいない」、「想定より高い水準への利上げが必要なら、そうする」とも述べており、従来からのタカ派姿勢も垣間見せていた。言うまでもなく、今回のFOMCは米欧で金融システム不安が台頭する中なかでの開催となったために、当局が示す対応姿勢もそれに対する市場の受け止めも非常に複雑なものとならざるを得なかった。短期的には金融システム不安への対応、中期的にはインフレ抑制のための行動が必要になると見られることから、どうしても当局による政策方針の打ち出し方がチグハグに見えてしまう。これは致し方のないことと言えよう。

加えて、同日行われていたイエレン財務長官の議会証言で「預金保険の広範な引き上げは検討していない」との発言が飛び出したことも、市場全体をリスク回避的なムードに誘うこととなった模様。とどのつまり、目先の優先事項は金融システム不安の沈静化であり、そこに一定の安心感・安定感が伴ってこないかぎり(疑心暗鬼が完全に払拭されないかぎり)、どうしても市場はリスク回避を優先せざるを得ないということになるのだろう。

ドル/円は、FOMCの結果が判明する直前まで132円台半ばの水準にあったが、その結果や議長発言などを受けて131円割れ寸前の水準まで大きく下落。さらに、本日の東京時間入り後には一時的にも131円割れの水準を試す動きを見せており、当面は131円処での下値サポートがしっかり機能するかどうかを見定めたい。

なお、先週16日まで下値を支えていた50日移動平均線は、いまや目先の上値抵抗となっており、本日に至っては一目均衡表の日足「雲」下限をも下抜ける動きとなっている。もちろん、昨日1日だけの動きでは確たることも言えず、目先的には1月安値から3月高値までの上げに対する61.8%押し水準(131.30円処)をクリアに下抜けるかどうかを確認したい。また、週足では、週明けから62週移動平均線を下抜ける動きとなっており、当面の下値は週足「雲」下限が一つの目安ということになりそうである。

本日は、英中銀金融政策委員会(MPC)の開催が予定されているが、昨日発表された2月の英消費者物価指数が予想外の加速を示したことから、0.25%ポイントの利上げ実施を決定することが確実視されている。その決定を受けてポンドに見直し買いが入るかどうかのも一つの焦点。ポンド/円やユーロ/円などクロス円の値動きがドル/円の下値を支える格好となる可能性もあろう。

ここにきてユーロ/ドルは再び大きく値を戻す動きとなっており、今週の週足ロウソクは一目均衡表の週足「雲」を上抜ける動きとなっている。足元では欧州中央銀行(ECB)の利上げ期待があらためて強まっており、勢いユーロ/ドルが1.10ドル処の節目を試す動きとなってもおかしくないと見られる。いまや、ECBはどの主要中銀よりも利上げを加速させる可能性が高くなっており、ある程度、ユーロの上値余地は拡がりやすいと見られる。

(03月23日 10:10)